

## 鐙（一 双）

奈良市難司町 手向山神社蔵

鉄製真鍮象嵌

高 $\times$ 26.0cm・長 $\times$ 28.8cm・巾13.5cm

桃山時代

手向山神社に伝えられているもので、鉄製の鐙に美しい文様を真鍮で象嵌した舌長鐙である。少しのいたみや「踏込」のころの塗りかえはあるが、全面に桐唐草、笹唐草、鳳凰、靈芝雲、流水に水草、菊花、葦に雁などの文様を真鍮象嵌でだす。

「かこがしら」「ちからがね」及び「踏込」の部分には文様はないが、「かこくび」から「紋板」にかけて全面に桐唐草文様を象嵌し、「鳩胸」の中央には靈芝雲にのる鳳凰を一つは左向き一つは右向きに出し、その上下左右は共に桐唐草、靈芝雲、笹唐草文様を隙間なく象嵌している。「やないば」の部分には流水に水草、波頭、菊花、桐唐草文様を出し「一文字」の部分には桐唐草文様が見られ、「舌先」の外面には全く趣きの変った風情ある葦に雁文様が象嵌されてまことに美しい。唐草のつる、流水、葦、雁は糸象嵌の手法を用い、桐、鳳凰、笹、菊、靈芝雲、水草、波頭には平象嵌の技法を施す。平象嵌には鑿彫りを行い文様に立体感を与えている。殊に、「鳩胸」の部分に見られる鳳凰は力強く、全体に鑿彫りがなされてその技術の精巧さを示しているが、一方の鳳凰がすでに大部分脱落しているのはまことに惜しい。

この鐙にみられる文様は、笹を竹に見立て、桐竹鳳凰文様とも解されよう。桐竹鳳凰文様は主上の御袍の文様であるが、この文様を鐙に使用したことには文様が文様だけに何か深い意味があつたと考えられる。当社の祭礼、手掻会には室町末期即ち天文八年まで勅使が差向けれていた。したがって、勅使専用の鐙と考えられなくもない。真鍮のわが国への輸入時期とも年代的に差支えないが、文様の風趣からみて桃山期も初期の作品と見るのが妥当であろう。

とにかく、珍らしい真鍮象嵌の初期の作例として貴重なものといわねばならない。（守田公夫）